

大阪市環境審議会 第1回「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」実行計画推進検討部会
議事録

〈司会〉

定刻となりましたので、ただ今から、大阪市環境審議会 第1回「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」実行計画推進検討部会を開催させていただきます。

委員の皆様方におかれましては、大変お忙しい中ご参加くださり、ありがとうございます。

私は、本日の司会を担当させていただきます大阪市環境局土壌水質担当課長代理の楠田でございます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

はじめに、本部会は、大阪市環境審議会規則第6条第1項におきまして、会長が必要と認めるときは、審議会に部会を置くことができると規定されております。また、部会長につきましては、同条第3項におきまして、部会に属する委員のうちから会長が指名するとされております。

本部会及び各委員並びに部会長につきましては、8月18日に開催されました第46回大阪市環境審議会におきまして、ご承認をいただいております。

本日は、第1回目の部会になりますので、私の方からご出席いただいております委員の皆さまをご紹介させていただきます。

大阪公立大学大学院工学研究科 教授の貫上部会長でございます。

近畿大学総合社会学部 教授の藤田委員でございます。

京都大学大学院工学研究科 教授の島田専門委員でございます。

大阪大学大学院工学研究科 准教授の中谷専門委員でございます。

続きまして、本市及び関係者の出席者でございますが、お配りしております配席図に記載のとおりとなっております。

なお、本部会での審議内容に関しましては、大阪市環境審議会と同様に、公開の扱いとなっております。本日の資料及び会議概要につきましては、後日、ホームページに掲載いたしますことをご了承ください。

それでは、開会に先立ちまして、環境局環境管理部長の金子からご挨拶申しあげます。

〈金子環境管理部長〉

環境局環境管理部長の金子でございます。

大阪市環境審議会 「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」実行計画推進検討部会委員の皆様には、ご多用な中、ご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

この「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」実行計画は、海洋プラスチックごみの新たな汚染ゼロの実現に寄与するため、またSDGs達成に貢献するための取組みとして、2021年3月に大阪府と共同で策定し、推進してまいりましたが、計画策定から5年目をむかえ、計

画期間の中間期にあたります。この間、海洋プラスチック汚染は、国際的にも深刻な環境課題として認識されており、各国・各地域で様々な取組みが進められております。一方で 2022 年に開催されました国連環境総会より、世界規模で海洋プラスチック汚染に対処するため、法的拘束力のある国際文書、いわゆる条約の作成に向けて、政府間交渉委員会で議論が進められておりましたが、本年 8 月の会合では、最終的な合意には至らず、引き続き協議が継続される状況となっております。こうした状況ではありますが、本市におきましては、「2030 年度に大阪湾に流入するプラスチックごみの量の半減」等の計画の目標達成に向け、引き続き各種取組みを着実に進めていくとともに、国際的な議論の状況や国などの動向についても情報収集に努めてまいりたいと考えております。

本日より、「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」実行計画の中間見直しなどについてご審議いただきますが、委員の皆様方には、本市のこれまでの取組みや計画の進捗状況などを客観的・多角的に評価いただくとともに、本市環境行政の推進に向けたご意見を賜りますようお願いいたします。

以上、簡単ではございますが、部会開催にあたりましてのご挨拶とさせていただきます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

〈司会〉

それでは、会議を始めるにあたり、資料の確認をさせていただきます。

本日の「次第」、「配席図」、「委員名簿」のほか、「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」実行計画中間見直しについての資料がございます。なお、資料は説明に合わせて、会場のスクリーンへの投影も行いますので、ご覧ください。

それでは、これ以降の議事につきましては、貫上部会長にお願いしたいと存じます。

貫上部会長、どうぞよろしくお願いいたします。

〈貫上部会長〉

環境審議会において、部会長に指名されました貫上でございます。

皆様のご協力を賜りながら、本部会の運営に努めてまいりたいと存じますので、よろしくお願いいたします。

それでは、議題の「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」実行計画中間見直しについて 事務局から説明をお願いします。

〈事務局〉

それでは、大阪ブルー・オーシャン・ビジョン実行計画の中間見直しについて、説明させていただきます。

1 ページ目をご覧ください。

本実行計画は、2021（令和 3 年）年 3 月に大阪府と共同で策定した計画です。

位置づけとしましては、SDGs 達成に貢献する環境先進都市をめざす、大阪市環境基本計画の中の個別計画の一つであり、2019 年の G20 大阪サミットで共有されました「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」の実現に向けた実行計画になります。本計画のめざすものとして 2 つ掲げており、一つ目として、「海洋プラスチックごみの新たな汚染ゼロの実現」、二つ目として、「大阪市環境基本計画として SDG s の達成に貢献」することを目指しております。本計画の期間は、SDGs のゴールである 2030 年度までとし、その中間期となる 2025 年度（今年度）を目途に、関連計画や、大阪・関西万博の成果を踏まえ、見直しを行うこととしております。

次のページをご覧ください。

計画の目標は二点あり、一点目は、2030 年度に大阪湾に流入するプラスチックごみの量を半減すること、二点目は、河川・海域の水質に係る国の環境基準を 100%達成、維持するとともに、水環境に関する市民満足度を 40%まで向上すること、を目標としております。これら二つの目標を達成するため、5 つの柱を立てて、それぞれの取組みを進めております。柱ごとの具体的な取組みにつきましては、後のスライドで、ご説明いたします。

次のページをご覧ください。

計画の目標と進捗状況についてですが、目標①の「2030 年度に大阪湾に流入するプラスチックごみの量の半減」について、2022 年度の暫定値になりますが、約 12%の削減となっております。調査の方法としましては、府域にある 10 地点をモデル河川として選定し、定点カメラ画像の流下ごみを AI により計測し算出しております。

次に、目標②の「河川・海域の水質に係る環境基準を 100%達成、維持する」については、2023 年度の結果は、97.3%となっております。大阪市内にある河川 38 地点と大阪湾の 9 地点の水質において、環境基準 38 項目の達成率になります。また、「水環境に関する市民満足度」については、2023 年度の結果になりますが、目標が 40%のところ 17.9%となっております。算出方法としましては 18 歳～60 歳以上の大阪市民 500 人を対象に、インターネットによるアンケート調査を実施しております。

次のページをご覧ください。

それぞれの柱ごとの指標とその達成状況について、説明させていただきます。

柱 1 の「プラスチック製品の使用抑制と環境への流出の削減」においては、5 つの指標を設定しており、2024 年度までの実績は推計中の項目もありますが、表のとおりとなっております。取組事例としましては、エコバック、マイボトルの推進などにより、プラスチック製品の使用抑制と環境への流出の削減を進め、指標値の達成に向けて取組みを進めています。

次のページをご覧ください。

柱 2 の「プラスチックの資源循環に向けた地域活性化のシステムの推進」としまして、2 つの指標を設定し、その達成に向けて取組みを進めています。本市が全国の自治体に先駆けて構築しております「みんなでつなげるペットボトル循環プロジェクト」は、資源ごみとし

て回収している家庭から排出されるペットボトルを、本取組みを実施していただく地域コミュニティと参画事業者が連携・協働して回収する仕組みになります。

次のページをご覧ください。

柱3の「海洋プラスチックごみ発生抑制のための国際協力」として、海外への情報発信や事業展開など様々な機会の創出に取り組んでおります。

本取組みの2024年度の実績としましては、累計で88件となっており、指標値の30件を達成している状況となっております。

次のページをご覧ください。

柱4の「良好な水環境の創造」として、5つの指標を設定し、環境基準の達成に向けた取組みや水辺施設を利用する市民の割合等を増やす取組みを進めております。なお、「イベントや河川クルーズなどを通して水辺空間を楽しむ人の数」につきましては、新型コロナウイルスの影響により計画策定時においては数値指標の設定が困難でありましたので、今回の見直しにおいて検討していただければと考えております。

次のページをご覧ください。

柱5の「あらゆるステークホルダーとの連携」については、2つの指標を設定し、NPO団体や市民団体などの連携を創出する取組みを進めております。本取組みの2024年度の実績としましては、35件となっており、指標値を達成している状況となっております。

次のページをご覧ください。

海洋プラスチック汚染に係る国際的な動きについては、2022年に開催された国連環境総会において、法的拘束力のある国際文書（条約）について議論するための政府間交渉委員会を立ち上げる決議が採択されました。昨年、韓国で第5回委員会が開催され、改めて8月5日～15日にかけて、スイスのジュネーブにおいて、会合が開催されましたが、合意には至りませんでした。

次のページをご覧ください。

今回の審議の内容ですが、先ほどのとおり、条約の合意に向けた議論が継続しており、国の方針や対策がすぐに示されることはない状況となっております。そのため、今回の見直しについては、目標②のインターネット調査を用いての市民満足度の取り扱い、未設定となっている指標値の設定、令和6年度までに達成している指標値等について、本部会において、ご意見をいただき、内容の見直しを進めていきます。まず、6-1 大阪市環境審議会委員からのご意見への対応について、と、6-2 民間ネット調査のアンケートを用いての市民満足度の取り扱いについて、ご説明させていただき、委員のみなさまにご意見をいただきたいと思いますと考えております。

次のページをご覧ください。

8月18日の審議会において、田中委員から「水環境」は、一般的な環境問題を考える時には、山、川、海という流域を想像する。本実行計画においても上流域も含めて目標としていると市民に誤解されてしまうのではないかとのご意見がありました。当局で調べたとこ

ろ、「水環境」については、法律等で定義されているようなものではなく、主体や時代に応じて変化しており、環境省が策定した「第六次環境基本計画」においては、「河川流域全体の生態系や景観、水質の保全等を推進する」というような方針が示されており、はっきりと決まったものではありませんでした。本実行計画においては、冊子の巻末資料の4に「水環境」に関して定義しております。正面スクリーンに該当ページを投影させていただきます。

続きまして、土壌水質担当係長の當山より、ご説明させていただきます。

資料12ページをご覧ください。

6-2 民間ネット調査のアンケート結果を用いての市民満足度の取り扱いについて、でございます。目標②の目標値は、水環境に関する市民満足度を40%まで向上する。となっております。算出方法は、18歳～60歳以上の大阪市民500人を対象者とし、①川や海の「水のきれいさ（見た目やにおいなど）」、②川や海などの水辺に生息する「鳥や魚、虫、草木などの生き物の豊かさ」、③水辺空間に対する「親しみやすさ」、④水辺空間で開催されるイベント等での「にぎわいの楽しさ」について、インターネットによるアンケート調査を実施し、「市民満足度」を算出しております。課題としまして、当該アンケートは、統計学的な調査ではなく、また、母集団の代表性を有しているかのような誤解を招く恐れがあるため、民間ネット調査のアンケート結果だけで市民満足度を評価することに問題があると指摘があり、目標値の設定や評価方法について、検討する必要があります。

次のページをご覧ください。

目標値の設定（案）について、現在の目標値は「水環境に関する市民満足度を40%まで向上する」となっておりますが、民間ネット調査での評価ができないため、数値化することはできませんので、40%を削除し、「水環境に関する市民満足度を向上する」に変更を考えております。また、評価方法についてですが、スライド下部の表にある水環境の満足度を向上させるために設定されている柱4の項目、及び海洋プラスチック削減に取り組む柱5の項目、きれいな水質の指標となる魚種の市内河川での確認地点数、水辺施設を利用した市民の割合、イベントや河川クルーズなどを通して水辺空間を楽しむ人の数、海洋プラスチックごみの削減等に関わるステークホルダー間の連携を創出した件数に加えて、当初の目標値であった満足度についての民間調査ネットの結果に加え、各種イベント時等における水環境に関するアンケート調査を実施し、母数を増やした状態で満足度の確認をする項目を追加し、3つ以上が達成、かつ残りの2つが未達成の場合でも、2024年度から上昇傾向にあれば、満足度向上したと判断する評価方法としたいと考えています。

次のページをご覧ください。

目標値と同様に民間ネット調査の結果を使用している指標の取り扱いについて、対象となりますのは、①プラスチックごみ削減の必要性を理解して行動している市民の割合と②水辺施設を利用した市民の割合になります。各指標の評価方法（案）でございますが、①の指標については、民間ネット調査に加えて、当局が実施及び参加しているイベントや小学校等

で実施している環境講座などでアンケートを実施し、母集団を増やして評価するようにします。②の指標については、①と同様に調査すると共に、人流調査を使用して利用者数の傾向を把握する予定としております。民間ネット調査については、今年度までは毎年、実施していましたが、最終評価を実施する 2029 年度に実施する予定で進めてまいります。

次のページをご覧ください。

大阪市内にある 15 の水辺施設の場所及び施設名称を示しております。

次の 16 ページから 19 ページまで、それぞれの施設の概要と 2024 年度の利用率について、記載しております。

飛ばしまして、17 ページをお開き下さい。

⑦中之島公園になりまして、利用率は 38%であり、15 施設のなかで 1 番高い利用率となっており、現時点で指標値を達成している施設となります。

飛ばしまして、20 ページをお開き下さい。

計画の目標①の大阪湾に流入するプラスチックごみの量の推計についてになります。

目標は 2030 年度に大阪湾に流入するプラスチックごみの量を半減することであり、基準となる 58.8t/年から、50%削減になります。次に算出方法については、正面スクリーンに投影して説明させていただきます。目標値については、現状、年間総量の推計結果は、大きく変動しており、その要因は明らかとなっていないため、実態をより適切に把握し、施策効果の評価に資することができるよう、引き続き推計の方法・精度の改善に取り組む必要があるため、現在、再推計されております。スライドの下段に、大阪市内を流れる府市管理の 11 河川の清掃について記載しております。市管理の 3 河川については、毎日 1・2 回、府管理の 8 河川について、2 日から 3 日に 1 回程度、定期的にごみ回収船が水面に浮遊するごみの回収を行っており、年間およそ 125 トンのごみを回収しております。

以上、6-2 までの説明となります。ご審議よろしく申し上げます。

〈貫上部会長〉

今、資料に基づきまして、ご説明いただきましたが、まず内容につきまして、何かご質問やコメントはありますでしょうか

〈中谷委員〉

説明ありがとうございます。まず、目標値の 58.8 トンは、推計方法によってかなり変動します。大阪府環境審議会の方でもこれを見直すのか、再集計値の検討がなされており、私も一部を手伝っておりますが、精度としてはあまり良くない数字ということで、客観的な数字としてとらえた方がよいと思っています。この 58.8 トンから半減させて 29.4 トンを減らすという、この数値にこだわり過ぎると危険であると思っています。海系の流入ごみの総量を把握するのは、大阪だけでなく、世界的にも多くの研究者が取り組んでいますが、かなり数値的な精度は悪いです。正解がわからないような、精度評価さえ難しいという状態だと思い

ます。大阪ブルー・オーシャン・ビジョンの 2050 年に新たなプラチックごみをゼロとする目標、大阪湾では 2030 年まで流入するプラスチックごみ量を半減するという目標がある以上、何か評価しないといけません、例えば清掃活動での回収量はどう変化したか、そういった指標も使えるのではと思います。大阪市内の河川では、毎日どこかの河川に清掃船を出して回収されていますが、その量が半減していれば、海域に出ていく量も半減していると間接的にとらえることもできますし、河岸、海岸でのボランティア清掃活動により回収したごみ量のデータも使えると思います。そういったものを見ながら、プラスチックごみ量の半減というのを何かしら評価できるのではないかと考えています。以上です。

〈貫上部会長〉

ありがとうございます。実際に調査いただいた中谷先生のお言葉ですが、事務局の方でコメントございますか。

〈事務局〉

今回、大阪市内の河川の回収量について、詳細な河川回収量のデータをご提供させていただいておりますので、内容を精査いただき、プラスチックごみの量の推計の基礎資料にさせていただくと考えております。また、現在、大阪府のほうでも大阪湾に流入するプラスチックごみの量の推計について検討されているところですので、その点も含め、大阪府とデータを共有しながら、内容を精査して提示したいと考えています。

〈貫上委員〉

関連してですが、河川のプラスチックごみの量については、雨天時の方が多いのでしょうか。

〈事務局〉

雨の影響ははっきりとは分かりませんが、大阪府市の管理している 11 河川の回収量を月別に確認しましたところ、これまでの 4 年間の回収実績をみると、6 月から 8 月の気温が高い時期に最も多い回収率となっており、11 月から 2 月の寒い時期が一番低いという結果になっておりました。その割合については、高い夏の時期に比べて、25%から 50%程度低い回収量になっていました。

〈貫上部会長〉

河川で回収されたものは、ペットボトルや飲み物が主なものだったのでしょうか。

〈事務局〉

河川で回収したの内容については、全てを調査していませんが、当課において河川清掃の組成調査を 4 年間実施しています。その組成分析の結果、回収されたごみの約 50%程度が

プラスチックでした。

〈貫上部会長〉

そのプラスチックの中の組成というのは、まだそこまではデータとして挙がっていないのでしょうか。せっかく調査されていますので、中谷先生のご意見もありましたように、この回収ごみのトレンドなどのデータがあるのであれば、次回にデータを示してもらえるでしょうか。

それともう1つは、先ほど大阪府の調査で雨天時とそうでないときに分けて調査されていました。晴天時と降雨時と分けて、流下するごみの個数をカウントしているということなので、そのデータがあれば、それも次回に提示をお願いします。降雨時の方が一番多いように思いますので、その出方や排出量との兼ね合いなど、場合によっては対策を考える必要があるかもしれませんのでよろしくお願いします。

〈事務局〉

資料については、次回に準備させていただきます。

〈貫上部会長〉

他の先生方、いかがでしょうか。

〈島田委員〉

資料6 ページ目の「海洋プラスチックごみ発生抑制のための国際協力」についてですが、情報発信等の件数の目標を変えとのことですが、国際的に発信した後になにかフィードバックがあったのかという点について伺います。その理由は、ステークホルダーとの連携のところに、広域的、国際的な連携に基づく新たな取組みが0件となっているためです。国際的な連携の創出となれば、大きな契約を結ぶなど、重要な話になると思いますが、情報発信した上でその国際的な場で、海外の方から反応があって、連携まではいかないが繋がりができた等の実績はあるのでしょうか。国際協力の2024年度実績は88件と数値のみ記載されていますが、可能なら相手方の反応が良かったなど事例はないでしょうか。例えば、市長と向こうの国との条約締結とまではいかななくても、民間や草の根でもよいので何か良いことの事例があったのであれば、次の見直しにはその内容を事例として紹介した方が良いと思います。

〈事務局〉

詳細な連携については、手元に資料が無いため、実績の内容や相手方の反応等を確認し、その概要を計画に盛り込むことも含めて検討します。

〈島田委員〉

確認いただいて、この計画のプラスになるような成果があったのであれば、例えば柱5の「あらゆるステークホルダーとの連携」のところのステークホルダー間の連携にカウントすることはできないでしょうか。資料8ページに連携の件数がありますが、この連携をどう定義しているのかを確認すべきとは思いますが、先ほどの情報発信した結果で何かプラスになっているというような成果が見つかれば、柱5の取組みに加えることができないでしょうか。できないなら、国際協力のところで、取組みの結果情報発信することによって、確実にプラスの成果が増えてきています、というようなことを中間の報告を行うなどして、積極的に計画に盛り込んでいただけると、大阪市が国際協力として情報発信していることで、海外からの反応があるということを市民の方に伝えることで、市民の方がもっと協力したいという気持ちなることにつながっていくと思います。他部局の方にも確認いただいて、国際協力について、計画に組み込めることがあればお願いしたいと思います。

あともう1点、資料12ページの6.2の市民満足度のところについてです。資料12ページで示されている「市民満足度の課題」として、民間ネット調査のアンケート結果だけで評価することが問題であるとされていることはもっともだと思います。民間ではなく大阪市が実施されている母集団が大きい全体的なアンケート調査の中で、環境に関する質問を入れていることはあるのでしょうか。

〈事務局〉

大阪市が全市的に実施している調査は特段なく、近年は民間ネット調査を利用した調査を、全市的に実施してきたところです。市民満足度の課題にある内容は、大阪市の情報公開審査会で指摘されたものですが、大阪市として、インターネット調査を利用したアンケート調査の結果だけで、目標や指標を設定することは問題ではないかということです。

〈島田委員〉

わかりました。今後、民間ネット調査に加えて、大阪市が実施するアンケートも行っていけばよいと思います。市民満足度の指標についてですが、大阪市が設定している市民満足度の指標から、市民が大阪ブルー・オーシャン・ビジョンに関連することにも満足しているのかがわかりにくいと思います。水環境の定義と同様ですが、すでに関わっている職員の皆さんにとっては、大阪ブルー・オーシャン・ビジョンでは、海洋プラスチックの削減と、水質の向上が繋がっていると当たり前に思っています。しかし、海に捨てられたプラスチックごみがあるとニュースで知って海洋プラスチックごみに対する問題意識を持っている市民の方も多いと思いますが、河川の水質の良し悪しの話と、海洋プラスチックの問題とが結びつくこと、この両方をしっかり取り組まないと海洋プラスチックごみ問題は解決しないということを、ご存じない方もいると思います。リサイクルに関しては、資料4ページに「プラスチックごみ削減の必要性を理解して行動している市民の割合」が記載されていますが、こ

これは、資源循環の観点からリサイクルが重要だと思って行動している人の割合を意味している可能性があります。その行動が大阪ブルー・オーシャン・ビジョンの計画にも繋がっていくことを知る市民が増えれば、今後さらに行動する市民の割合が増加する可能性があると思います。水環境の定義を加えるだけでなく、水環境に関する取組みと大阪湾に流入するプラスチックごみの量の削減が繋がっていることを伝えられるように、出前講座やイベントの内容を考えて実施したりアンケート項目の設計を少し工夫すれば、イベントに参加するなどの行動する割合が増えていけば、市民満足度の目標値として 40%などの数値を入れても大丈夫なのではないかと思います。アンケート調査の結果については、回答者の数が少ないので、2、3 年程度経過をみないとわかりませんが。今後のアンケートの実施計画では、慎重に、かつ、もう少し広報を意識して、学習環境の部分も含めた、大阪ブルー・オーシャン・ビジョン実行計画の理解が進んでいるかがわかるようなアンケート調査を行い、結果がもし向上しているようであれば、成果として使えるのではないかと思います。そのためにもアンケート内容や市民満足度を把握するための工夫が必要だと思います。このアンケート調査の見直しのところは、部会でも議論していかなければならないと思います。

〈事務局〉

ご意見ありがとうございます。今いただいた意見が、我々としても一番課題として持っているところだと思っております。本市では、色々な取組みを行っておりますし、プラスチックのごみ減量に取り組んでいます。それが大阪ブルー・オーシャン・ビジョンというものにどう繋がっているのかという点を、市民の皆様に対して、大阪ブルー・オーシャン・ビジョンとは何かというところが、まだ十分に伝わっていない部分が多いのではないかと感じています。市民満足度などの意見の根本的な部分になりますが、どのようにこの大阪ブルー・オーシャン・ビジョンを皆さんの取組みに、意識に繋げていくかという点は大きな課題だと思っております。今いただいたご意見を踏まえて、我々の中でもう一度検討していきたいと思っております。最初の国際連携の件についても、現在も色々な国際会議などで発信はしています。ただ、実際にはまだフィードバックまで至っていない状況であり、資料 8 ページにもあります国際的な連携に基づいた取組みがまだ 0 件ということに繋がっていると思います。今後は、こうした取組みを創出していくのが理想ですが、まずは先ほど申し上げました通り、この大阪ブルー・オーシャン・ビジョンの理念をどのように広めていくか、それを市民の皆様や国際的にどう受け止めていただくかという点についても、発信の仕方も含めて、ご意見を踏まえ検討していかなければならないと思っております。

〈貫上部会長〉

私自身も、今回の部会で部会長をやってくれと言われた時に、ブルーオーシャンは海だというイメージを持ちました。今回部会については、河川の話が中心となっているので、PR をしていくことが大事だと思います。島田委員のご意見のとおり、プラスチックなので本当に

ごみとよくつながられる話だと思いますので、こちらの話とうまくリンクして、市民の意見について、本来の目的に合わないような意見ではなく、何のためにやっているかを理解してもらった上でアンケート調査をお願いしたいと思います。

同様に思ったのが、資料 11 ページの環境省の水環境に関して、景観の記載がありますが、これは川を取りまく周辺のものすべてと個人的に思っています。大阪市としては、その景観のところをいろんなイベントや行事に置き換えた形で考えられているのでしょうか。河川流域全体の生態系や景観、水質の保全等となっていますが、生態系と水質はよいと思いますが、景観と言われたときに大阪市がイベントとしてにぎわいととらえているのかと思ったので。

もう 1 つ、資料 12 ページのアンケートの話です。市民の満足度について、数値は入れないということですが、市民が本当に何を期待しているのか、都市河川において、何をどうしてほしいか、ずれていないのかなというのは、島田先生からのご意見もありました。資料 12 ページにある「①水のきれいさ（見た目やにおいなど）、②水辺に生息する生き物の豊かさ、③水辺空間に対する親しみやすさ、④水辺空間でのイベント等でのにぎわい」について、本当に狙っているのかどうかというところ、期待しているかどうかという話もあると思います。アンケート調査をする場合、イベントに来られる方なので、それなりに意識がある、あるいは、子どもを連れている若い方などが来られるので、河川や海に対してどういうことを求めるかということを、何か基礎データのなものとして取っていただく必要があるのではないのでしょうか。

例えば、水辺空間の親しみやすさなどの話や、生き物の豊かさという話になったとき、釣りをする方や、実際に魚を見ている方が、どれだけいるのかは疑問に思います。本当に市民は何を思っているのか、どう感じているのかということです。定期的に期待することも変わってくると思います。昔は川で泳いだなどの話があると思いますが、そういうものは今ありえない話です。そのため、本当に的を射たアンケート調査をする場合、満足度の項目にどの程度期待するかを入れていただくのも一つの方法だと思います。まだ提案の段階ですが、いかがでしょうか。

〈事務局〉

現在、ハードの政策、計画の部分については、資料 11 ページの第六次環境基本計画にある文言では景観という言葉となっています。我々のとらえ方としましては、その下にある本計画における水環境とは、ハード面、水辺を楽しむための遊歩道や船着き場といった施設、それらの水辺空間で行われる祭りやイベント、クルーズといったソフト面、この辺りを景観というとらえ方をしていると思っております。

また、島田委員からご指摘がありましたアンケートについては根本的な部分だと思います。まず満足度以前に、市民の皆様が何を求めているかをとらえることが基本的な部分だと思っております。そのあたり、これからの我々のアンケートや市民への問いかけについては、

含めて検討してまいります。

〈貫上部会長〉

本当に市民がなにを求めているかということは、時代によって変わってくると思いますので、長期的な意味合いで、アンケートを毎年でなくても良いので、とり続ける方がよいと思います。

〈藤田委員〉

質問というよりはコメントになります。先ほどの水環境についてですが、ウェルビーイングを目指して、水という切り口で、今の大阪市をよくするためにオール大阪で考えていく計画だと思います。それで言うと、例えば、資料4ページについて、島田先生からもご意見がありました。給水スポットの水色スイッチは「水で人の行動変容を変えていく」ということで、「水」プラス「スイッチ」ということのようにです。大阪市内に現在6ヶ所あると思います。大阪市役所の1階と大阪城公園に3つあって、先週学生と一緒に行ってきました。水色スイッチのデザインは、デザイナーさんと芸術家さんに依頼され、設置場所ごとに特色のある文化的な意味合いを込めたデザインにされています。設置スポットは少ないですが、人の行動変容を促すことで、リサイクルになったり、プラごみを減らしたり、人々が自分たちの暮らしを見つめ直すという意味があります。環境省でも賞を取られていますが、mymizu（マイミズ）ネットワークでは無料給水アプリを提供されており、アプリを入れると給水スポットのリストが表示されます。昔ながらの公園のちょろちょろ流れる水や、大学の体育館の横に設置されている押すと水が出るタイプまで、様々なスポットが示されます。また、市民参加型のマイボトル推進運動も広がっていると思います。枠組みとしては、各種SDGsをはじめとした環境の課題に関わっているだけでなく、水に着目しても意義があると打ち出せば、十分ご理解いただけると感じます。万博でも給水スポットが話題になっており、実際にリアルタイムで給水量を計算してもらったところ、2人に1人が万博来場者の中で利用している計算になっています。ただ、ハード面・ソフト面も含めて、水を含めた公共空間をどう整理していくかが重要です。給水スポットも水道直結なのか、ボトルで運ぶのかによって投資コストが大きく変わります。そうした点についても、分かりやすくご理解いただけるような計画コラムなどを盛り込んでいただけたらと思います。アンケートは、満足度と実際の客観的なデータが必ずしも一致していないということを貫上部会長からありました。生き物がいると言っても、トビウオなどの飛んでいるものはわかりますが、底に大切な生き物がたくさんいても生活の中では見えません。その点で、客観的なデータで生物多様性が確保されていることなどを打ち出した後で印象を聞くなどの工夫が必要であり、現在の方法ではアンケートの制度設計自体にかなり問題があると思います。大阪府の「おおさかQネット」などで政策について個別に継続して調査しているところには緑や水なども含まれていて、マイボトルの持参などの認知や行動も含まれていると思うので、過去のものも合わせて議論

できればとても良いものになると思います。

今まで出てきていない点としては、資料 15 ページ付近で議論された、利用したことがあるかないかで、ある人が多いほど良いとされる評価についても先ほどと同様、距離的な問題や個人の行動特性にかなり左右されているのではないかという気がします。ふらっと行けるところもあれば、特定のこだわりを持つ方しか行かないところもあり、個所数は並べられています但特色が異なると感じます。直感的にはそう感じるので、知っているか知らないか、行ったことがあるかないかまでは把握できると思います。知っているけれど行っていないという方にも知ってもらうことにも意味があると感じました。先ほどの水環境については難しいと思いますけど、この計画でいうと、水辺空間のソフト・ハード面の整備と、それが市民の人たちや関係するステークホルダーの人たちがどう関わっていくのか、客観的なデータをどうとらえるのかということにつきると思うので、そのあたりはバランスよく追いかけていけば理解しやすいものになると思います。いま大阪のことだけの話題にしていますが、先ほど調べたところ、都市ランキングというのを森記念財団都市戦略研究所が公表されていて、今年大阪市は比較都市の一番ですが、環境面だけがかなり弱いということです。その環境の指標のこと自体も疑わしいところがありますが、例えば、自然環境中の水辺の充実度など、河川がどのくらいあるのかという客観的なデータを横並びで見たときに、大阪はどのような状況なのかというデータを出していけばよいと思います。最近は SNS の発信で都市の特性を見ることができそうですが、大阪は食べ物ばかりで自然がほとんどないというイメージです。そもそも計画の前段階で大阪がどのようなところで、都市の中でどのように評価されていて、特色ある水について、ブルー・オーシャン・ビジョンを目指して、より良い大阪にしていくため、みんなで頑張っていますというストーリーを示し、説明を尽くしていただくと、とても良い話になると思います。なお、アンケートは評価も含め、修正検討いただきたいです。先ほどのご説明の中でも全体の計画の中の枠組みにあたるので、様々なところで上下と関連するのは仕方ないと思うので、部局横断的に全方面からそれぞれの活動を評価して、究極的にはウェルビーイングにつながっていくことになるのではと思います。

〈貫上部会長〉

多くのご意見をいただいたかと思いますので、何か事務局の方でございましたらお願いします。

〈事務局〉

藤田委員、ご意見ありがとうございました。市民の皆さんに、どのようにアピールをしていくか、我々のやっていることをどう伝えていくかに尽きると思います。ご意見を参考にさせていただきながら、内部で検討し、環境のアピールができるよう進めていきたいと思ひます。

〈藤田委員〉

例えば、兵庫県さんも、私も関わっていたエメックスという閉鎖性海域の国際会議では、市民のみなさんの活動と、行政や学術を結ぶことで、理系と文系が融合して、様々な活動がされています。閉鎖性水域は、大阪湾も入っていて、国際協力を含めた広域連携により、アピールできる道がたくさんあると思いました。そういったところで発信してフィードバックをいただいてはいかがでしょうか。大阪府は独自のツールも伝統的に持っているので、市民のみなさんの教育プログラムや外で発表するプログラムも多くありますので一緒に取り組んでいただければと思います。

〈貫上部会長〉

ありがとうございます。他にありますでしょうか。

〈中谷委員〉

資料 13 ページで市民満足度の評価のところが気になります。40%という数字が、アンケートだけで定量的に意味があるのかという点で数値を設定しないことは良いと思います。ただ、先ほど口頭説明で、5つの指標の達成度について判断する際、5つの指標のうち3つがポジティブであれば満足度が向上したという評価の考え方だったと思います。その場合、その旨を明記された方がよいと思います。5年後に評価する際、基準がないと困ると思いますので、もし5分の3というものがあれば、5つのうち3つがポジティブであれば達成と評価する、と明確にした方がよいと思います。また、満足度の指標は5つありますが、今までの委員みなさまのご意見を踏まえると、一つ目の指標にある、魚が何地点で確認できたかというのは市民満足度の評価としては少し違和感があります。魚がいても人がそれに気づかなければ、満足度への影響は何もないのではと思います。あと2つ目、3つ目の指標は、特に良いと思います。4つ目の指標の海洋プラスチックごみ削減等に関わるステークホルダー間の連携を創出した件数についても、これがなぜ市民満足度に繋がるのか、評価指標として使えるのか分かりにくい部分があると思います。連携を創設した結果、何か満足度に繋がる事象があれば、そこを評価したらよいと思います。しかしながら、単純にステークホルダー間でNPOのAとNPOのBを繋げた、または一つのイベントに集めたのが連携というのであれば、それがなぜ市民満足度に繋がるのかについて、その説明を補足するか、指標を再考するのが良いのではないかと思います。

〈貫上部会長〉

ありがとうございます。事務局からご意見があればお願いします。

〈事務局〉

指標の中身についてですが、もともと柱があり、その柱を達成することで市民満足度が向

上するのではないかとということで、柱4を設定しており、そこからピックアップした内容を指標としております。指標の内容を再精査し、分かりやすく、新たにピックアップするだけでなく、例えば魚が戻ってくことで、きれいな河川が戻り、それが満足度につながるなど、分かりやすく説明したいと思います。達成状況や基準についても整理し、次回の部会でお示ししますので、その際にご意見をいただければと思います。

〈貫上部会長〉

確かに中谷委員のご意見のとおり、魚の種類や連携創出の件数は市民満足度とは少し関連が薄いかと思いますが、魚が戻ってくることは科学的な指標として、望ましい水環境をつくるという意味で非常に重要であると思います。そのあたりはもう少し仕分けした方がよいと思います。

それでは、前半部分が終わりましたので、次の資料21ページ以降について、事務局の方から説明をお願いします。

〈事務局〉

それでは、資料21ページから、説明させていただきます。

未設定となっている指標値の対象としましては、柱4の良好な水環境の創造の事業になります。事業概要としましては、大阪市の水辺空間を利活用し、経済の活性化につながる、にぎわいの創出に向けた取組みを進めることとなります。指標につきましては、イベントや河川クルーズなどを通して水辺空間を楽しむ人の数となりまして、こちらは、新型コロナの影響により未設定となっていたものになります。算出方法につきましては、スライド下部の大阪市内のマップに示しているエリアを運航しているクルーズ船の利用客数及び本市関係部局が参加・主催している、春夏秋冬イベントウィーク、上下水道施設の見学会等の水辺に関するイベントに参加した人数を考えております。

22のページをご覧ください。

こちらのグラフは、2013年度から2024年度のクルーズ船の利用者数、イベントの参加者数を示したものになり、青色がクルーズ船、赤色がイベントの人数になります。新型コロナの5類へ移行後の2022年度から2023年度にかけては、利用者数は急増していますが、2023年度の利用者数合計、約133.4万人から2024年度は約140.5万人となっており、おおむね横ばいとなっております。要因としまして、クルーズ船は運航時間、乗船数に限りがございますので、現時点で頭打ちの状態となっております。指標値につきましては、クルーズ船の利用者数を維持しつつ、イベントにおける参加者数を増やせるよう啓発等を実施し、2024年度の利用者数の140万人を基準とし、2030年度までに1万人増の141万人とさせていただきますと考えております。

23ページをご覧ください。

続きましては、令和6年度までに達成している指標値等の変更になります。現時点で達成

しておりますのは2つの指標となっております。まず、1つ目は、柱3の海外への情報発信や事業展開の機会を創出した件数になります。算出方法としましては、海洋プラスチックごみによる海洋汚染に対して、開発途上国を含む世界全体の課題として対処するため、大阪府、大阪市、企業及びNPO・NGOを含む各種住民団体による先進的な取組みを、海洋プラスチックごみの削減等に向けて、積極的にアジア等諸都市に展開するとともに、支援を継続した件数をカウントするものとなっております、2024年度までの創出件数は累計88件となっております。次に、新目標値の設定についてですが、パートナー都市における環境協力及び国際機関との連携の継続を図り、本計画開始からの4年間の平均値である1年あたり約20件を目標とし、また、海外展開をめざす企業による情報発信や事業展開の機会の創出を行うことで、2030年度までに「200件」とさせていただきたいと考えております。

24ページをご覧ください。

2つ目は、柱5の海洋プラスチックごみの削減等に関わるステークホルダー間の連携を創出した件数になります。新規で様々な企業、NPO、地域団体など、ステークホルダーとの連携を創出してきたこと、また、継続して連携している企業や団体と、新たな企業や団体等との構築の輪に繋げることができたことから、2024年度で35件となり目標を達成しました。次に、新指標値の設定についてですが、連携を維持する企業や団体が少なくなり、また、新たな企業や団体を見つけるのが困難な現状であり、さらなる連携の輪を拡げるが難しくなっている等の課題がありますが、新規団体のピックアップや既存の団体等を連携させ、環境問題への取組みを維持する必要があるため、当初計画の1年あたり3件創出の維持し、2030年度までに「50件」とさせていただきたいと考えております。

未設定となっていた指標値の設定及び達成済みの指標値の変更については、以上となります。

続きまして、土壌水質担当の平井から、ご説明させていただきます。

25ページをご覧ください。

本実行計画の中間見直しにあたっては、大阪・関西万博の成果を踏まえて、見直すこととなっております。大阪・関西万博において、基本的な考え方や姿勢を示す「持続可能な大阪・関西万博開催にむけた方針」においては、5つの目標が掲げられており、そのうちのひとつとして「大阪ブルーオーシャン」を含む国際的合意の実現に寄与する会場整備・運営を目指すという目標が掲げられております。

26ページをご覧ください。

具体的な取組みとして、「資源循環」と「生態系・生物多様性」に関する取組みが挙げられます。「資源循環」に関しては、会場内外での行動変容を促すため、来場者が主体的に参加できる仕組みを設けており、万博終了後も取組みが続くようレガシーの創出を目指すこと、また、プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律に基づき、特定プラスチック使用製品の削減、ワンウェイプラスチックの削減、容器包装類のリユース・リサイクルを推

進し、プラスチック資源循環戦略に掲げられた目標を前倒しで目指すとされております。次に、「生態系・生物多様性」に関しては、自然との共生や快適な環境の確保をし、会場周辺に生息、飛来する絶滅のおそれのある動物や生育している貴重な植物については、地元自治体等とも連携し、自然環境・生態系の保全及び創造に配慮するとされております。

27 ページをご覧ください。

実際の「資源循環」の取組みといたしまして、フードトラックエリアにおけるリユース食器の導入や給水スポットを設置し、マイボトルの利用を促進、マイバッグ等の持参・エコバッグや紙製の手さげ袋の販売推奨、レジ袋の販売・配布の禁止を行っております。

また、地域冷房システムによる空調の一元化に加え、帯水層蓄熱や海水熱利用などの取組みも実施されております。

28 ページをご覧ください。

万博に関連して、本実行計画の取組みを推進する啓発事業を行っております。万博会場内において、9月15日に、「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」をはじめ、大阪市の水環境への取組みを動画やパネルで紹介いたしました。また、10月5日には、新しく整備された淀川区十三船着き場において、海洋プラスチックごみ問題や水環境などに関する啓発事業を実施する予定です。また、大阪・関西万博の開催を契機に実施された事業といたしましては、大阪市内全域での路上喫煙禁止・喫煙所の設置がございます。令和7年1月27日に大阪市内全域での路上喫煙を全面禁止する条例が施行されており、喫煙所は8月1日時点で公設、補助設置あわせて188箇所が確保されております。また、市内全域の路上喫煙禁止に関する市民等への周知及び啓発活動の強化も併せて実施しております。

大阪・関西万博の取組みや成果につきましては、閉幕後に改めて内容を確認し、本実行計画に追加していきたいと考えております。

29 ページをご覧ください。

本実行計画の策定時以降に新しく開始された事業といたしまして、プラスチック資源の一括収集がございます。これまで普通ごみで収集していた製品プラスチックを、容器包装プラスチックと合わせ「プラスチック資源」として収集する取組みを令和7年4月に開始いたしました。本取組みは、柱1「プラスチック製品の使用抑制と環境への流出への削減」の取組みの一つとして追加したいと考えております。

30 ページをご覧ください。

次に取組みの指標となっております魚類生息調査についてです。調査はおおむね5年に1回の頻度で、図に示しております市内19地点において実施しており、「きれいな水質の指標となる魚種の市内河川での確認地点数」を確認しております。

次のページの31ページ、32ページに、最新の調査である2022年度の結果を、図に示しており、きれいな指標種が確認された地点は、19地点中の9か所となっております。

33 ページをご覧ください。

調査地点について、現在、一部の河川流域において設定していないため、調査地点数の追

加を検討しております。候補地点は、図に示しておりますとおり、2 か所ございます。

1 か所目は、城北川です。城北川は、大阪市として水質の改善や遊歩道の整備など、水辺環境の整備を実施している河川です。2 か所目は、大和川下流です。大阪市を代表する河川の一つで、流域面積が大きいことが特徴です。ただし、大和川では、上流側でも調査を実施しており、大きな河川の合流もないため、生息する魚類が同一になる可能性が考えられます。そのため、上流側の調査地点を下流側に移動することも併せて検討しており、御意見を頂ければと考えております。

続きまして、土壌水質担当係長の華より、ご説明させていただきます。

34 ページをご覧ください。

有機フッ素化合物（PFOS・PFOA）の取組みについて、ご説明させていただきます。公共用水域につきましては、令和2年5月28日付けの環境省通知を受け、令和3年度より、大阪府が策定した水質測定計画に沿って調査を実施しています。国や府は3年で一巡するローリング調査を基本としていますが、大阪市では2年に1回測定を行う事とし、令和3年度、5年度、7年度に調査を実施しております。

35、36 ページをご覧ください。

35 ページから 36 ページにおいて、令和3年度から令和6年度の調査結果となりますが、一部の地点で超過が確認されております。

37 ページをご覧ください。

地下水につきましては、国が実施した全国的な調査で、令和2年度に本市の地下水において暫定的な目標値の超過が確認されました。大阪府の地下水質測定計画の測定項目にPFOS・PFOAは設定されていないことから、本市独自で内容を決定し、令和3年度から調査を実施しています。調査内容としましては、国の調査で超過が確認された地下水について、令和3年度より毎年、継続調査を実施しております。また、本市の状況を把握するため、令和3年度から3年間で各区1ヵ所ずつの調査をすすめ、令和6年度からは2年間で各区の調査を実施しております。また、超過した地下水については、継続監視を行っています。本市の取組内容としましては、市内に飲用井戸はありませんが、飲用されないよう周知・徹底を図ると共に、超過が確認された井戸周辺の井戸管理者に対して個別訪問による注意喚起を行っております。また、消火設備点検に係る講習会を通じてPFOS・PFOAを含有しない消火器へ置き換えるよう啓発を行うと共に、PFOA対策連絡会議に参加し、摂津市の事業者における対策状況の確認を行っています。

38 ページをご覧ください。

令和3年度～令和6年度の調査結果ですが、38 地点のうち 19 地点で超過が確認されております。

39 ページをご覧ください。

現在、PFOS・PFOAは環境基準ではなく要監視項目であるため、本実行計画の指標とは、

しませんが、本市における取組みとしましては、公共用水域は引き続き 2 年に 1 回測定を行ってまいります。また、地下水につきましては、全市的な状況把握を行いつつ、超過が確認された地下水の継続調査を重視していくこととし、継続調査の頻度を現在の 3 年に 1 回から 2 年に 1 回に変更して実施してまいりたいと考えております。

なお、東淀川区で超過が確認されている地下水については、引き続き毎年調査を実施いたします。

以上となります。よろしくお願いいたします。

〈貫上部会長〉

21 ページ以降について、ご質問やご意見がありましたらお願いいたします。

〈島田委員〉

先ほどの質問に関連していますが、資料 23 ページの「海外への情報発信や事業展開の機会を創出した件数」についての新指標値を、今後、200 件に増やされるということで、これについて異論はありません。事業展開の機会を創出することは、場を提供することだと思いますが、事業展開の場を提供した結果事業展開の成立が既にあるのであれば、資料 24 ページに記載されている「国内のステークホルダー間の連携」の指標値のカテゴリーに入れるか、もしくは、指標の説明を工夫するなどして、発信の場だけを作っていると解釈されないようにしていただければと思います。

もう 1 点ですが、関西万博の取組みを今後第 2 章に加えられるとのことで、資料 26 ページの囲み部分で、国際的合意としてパリ協定、大阪ブルー・オーシャン・ビジョン、生物多様性枠組が示されそれらの実現に寄与する会場整備・運営を目指す、とされていますが、具体的な記載の中に、大阪ブルー・オーシャン・ビジョンの取組みについての言及がないように思います。「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」実行計画の目標の 1 つは「海洋プラスチックごみの新たな汚染ゼロの実現に寄与する」ことで、26 ページには「特に排出量が多く留意すべき事項として、プラスチック対策等が挙げられる。」と記載されています。大阪ブルー・オーシャン・ビジョンの実現に寄与する会場整備・運営を目指すのであれば、海洋への排出や海洋への汚染につながる排出の対策も記載した方が良いと思います。資料 27 ページを見ると、プラスチックごみのリサイクルや温暖化対策、水辺を利用する鳥類への配慮等が書かれていますが、大阪ブルー・オーシャン・ビジョンの目標や取組みについても加えた方が良いと思います。今後、第 2 章に加える予定とのことです、アピールをさらに加えていただければと思います。

また、資料 29 ページのプラスチック資源一括収集の取組みについても、さらなるごみ減量やプラスチック資源循環を目指すという内容ですが、この取組みが大阪ブルー・オーシャン・ビジョンの計画目標につながるということも記載していただければ良いと思います。検討よろしくお願いいたします。

〈貫上部会長〉

計画に反映するということは、資料 29 ページにある矢印のところで示しているという考えですね？

〈事務局〉

今回の資料については、取組みを追加することで記載しておりますが、実際の計画に入れ込む際は、わかりやすく記載する予定です。

〈島田委員〉

分かりました。この取組みを環境局の仕事として行われる際は、先ほどの大阪ブルー・オーシャン・ビジョンの計画とプラスチックごみ削減等の繋がりがわかりにくいということもありますので、できるだけ大阪市のこの取組みが大阪ブルー・オーシャン・ビジョンに繋がっていることを、市民のみなさんの活動がこの計画に全部繋がっているということを地道に啓発していかないと、市民の意識の向上は難しいと思いますので、よろしくお願いします。

〈貫上部会長〉

島田委員のご意見のとおりだと思います。実際にプラスチックの資源の収集だけではなく、全部に繋がる形で持っていけたら良いのではないかと思います。前半の方で、委員からご質問があった件や万博の話も含めて事務局から説明をお願いします。

〈事務局〉

ステークホルダーや事業展開にあたりましては、改めて確認したうえで、どういった取組みをされているか具体的な内容をもう少しご提示し、計画の中にも実際こういう取組みを達成したので次なる目標を立てました、とわかるように、次回の部会のときには提示いたします。

万博の取組みに関しまして、方針は開催前に博覧会協会で作成されたものになります。今からその内容を変更するのは難しいところがありますが、最終的に万博閉幕後、博覧会協会が取組み内容についてとりまとめが行われると思います。我々の意見も伝えさせていただき、その内容が実行計画のなかに記載できるかも含めて確認させていただきたいと思います。

〈島田委員〉

博覧会協会に計画のコンセプトを理解していただき、万博閉幕後の取りまとめの際には、大阪ブルー・オーシャン・ビジョンの目標にも貢献できたことを記載するよう、働きかけていただきたいと思います。

〈藤田委員〉

先ほどの資料 21 ページ、22 ページのところで、良好な水環境の創出がにぎわいを創出することにより、その場所に呼び寄せられる人が増えているという評価になっているかと思います。市民のみなさまの満足度についても触れられていましたが、訪日外国人旅行者等、大阪に来る人々が良好な水環境のにぎわい創出に一定の貢献をしていると思うので、そうした人たちの量的な把握も今後必要ではないかと感じました。また、かわまちづくりやはちけんやなど、イベントの回数や人数がもっと多いのではないかと思います。そういったかわまちづくりとの関係も、量だけでなく質を見たいところです。今回は量的な把握という視点ですが、ご検討いただきたいです。

河川の話でいうと、大阪は渡船を持っており、天保山を除いて、学校が近いところでは人が多く利用されており、このような利用も身近な水環境を見る機会です。地域密着型で、インフラ整備として渡船を伝統的に大阪は維持している全国で唯一の政令指定都市でもあります。水を市民に知っていただくという点で、この計画で取り扱ってもよいのではないかと感じました。

万博のことは私もすごく気になっていて、博覧会協会の資源循環ワーキンググループのご報告を聞きました。フードトラックのリユース食器なども報道されていますが、ごみ箱問題で、その食器を回収する場所がわかりにくいので、結局ごみ箱に捨てられているなど、レガシーというよりは、そこから出た課題を次に生かす部分もあると聞いています。その辺りのプラごみについて、博覧会協会の報告を含めて実際どうだったのか、どのように公共整備をしていけばよいのか、分別をどのようにするかなど、その先がないと回収ができないという課題もあると思います。今回、せっかくの機会ですので、現状を振り返ることができるのであれば、そこはぜひ期待したいと思いました。

〈中谷委員〉

資料 22 ページのクルーズ船のイベントのところで、140 万人を 141 万にするという 1 万人というのがよくわからなかったのですが、これは既に 140 万人というのは望ましい形を実現していて、それを今後維持していきましょうという意味だと思いました。そういうことなら 140 万人を維持するでよいのではと思いました。1 万人を増やすというのは、数値の変動を見ていると誤差に埋もれるようなものであるため、これを指標値として達成、未達成の評価をするというのはあまり意味がないように思います。なぜ 141 万人にされたかをもう一度教えていただきたいです。

〈事務局〉

水辺空間を楽しむ人の数として 140 万人でも大阪市民やそれぞれの人数から見ると十分達成していると思っておりますが、柱 4 の良好な水環境の創造についての達成状況がよくないということから、現状のまま維持していてもその達成は難しいと考えています。その

ため 2030 年度までに 1 万人、年間 2000 人程度増やしていきたいと考えております。年間 2000 人は、2017 年からイベントの集計をしています、大規模な一度きりのイベントがいくつかあり、継続するイベントではありませんので、それを除外して継続しているイベント利用者数の平均を取ると、1 年あたりおよそ 2000 人となっていましたので、毎年 2000 人ずつ積み上げていきたいと考えています。

〈中谷委員〉

わかりました。クルーズ船はもう頭打ちと言われておりましたので、イベントの方をもっと増やしていきたいということなので、そのことがわかるような内容とした方がよいかと思います。サップを使ったイベントが積極的にされていますから、それが年間 2000 人の増加につながっていくと思っています。

また、万博の件について、万博会場でのプラスチックのことであれば、ブルーオーシャンドームでの取組みが啓発という意味でとても効果があると思っています。NPO 法人ゼリ・ジャパンという団体の取組みではありますが、万博全体の取組みとして位置付けられると思っています。その取組みと今回の大阪府市の「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」実行計画とは全く別で切り離されたものであるから、この計画には出てこないのでしょうか。啓発などでいろいろ考えておられますが、ドームで行われていること以上の啓発は他にはないと思うぐらい大きなことをされていると思うのですが、今回の計画には全く入れないのでしょうか。

〈事務局〉

NPO 法人ゼリ・ジャパンの取組みは、大阪府市の「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」実行計画とは別の形で行われておりましたので、我々が勝手に取組みを入れ込むことはできない状況です。先ほどの万博に関してご意見がありましたが、これから総括に向けて博覧会協会も動いていかれると思います。その中で、我々の計画に、これから先の視点も踏まえて、どのように取組んでいくのかという内容にブルーオーシャンドームの取組みが入ってくるのであれば、そこも取り込ませていただければと考えておりますが、現時点では別の取り扱いとなっているということをご理解いただければと思います。

〈中谷委員〉

承知いたしました。最後に 1 点、資料 33 ページの大和川の調査地点を増やすか移動させるかということについて、汽水域の魚類と淡水域の魚類は全く別だと思うので、すでに地点がある上流は完全に淡水域のため、下流のもっと海側の汽水域を対象にすれば、上流とは違った魚類になるという意味で調査ができるのではないかと思います。

〈貫上部会長〉

大和川の下流はアユも定期的に確認されるなど水質もきれいになってきていると聞いておりますので、下流側を増やすことでよいのではないかと思います。

最初にあったご質問の件について、イベントを中心に利用者数を増やしていくという点をもう少しわかりやすく記載いただけたらと思います。ちなみにクルーズ船は毎回満員で、これ以上は増やせないような状況なのでしょうか。

〈事務局〉

クルーズ船について、利用者ニーズのある時間帯はほぼ満員と聞いております。ただし、朝の時間帯や利便性が悪い離れた場所のところは人がなかなか来ず、席は空いているものもあると聞いております。

〈貫上部会長〉

これ以上、船を増やすということも難しいのでしょうか。

〈事務局〉

船着き場施設の状況から、現在のところ船を増やすことは難しい状況と聞いております。

〈貫上部会長〉

わかりました。

〈事務局〉

インバウンドの人数は切り分けて算定できればいいのですが、おそらく難しいと思っております。これから5年先の利用者考えたときに、インバウンドがこのまま続くかどうかにもよりますし、そこは予測が難しいところもあります。そして、先ほど中谷委員からご指摘がありましたように、基本的には横ばいで考えておかないと、これから先、今以上にインバウンドが伸びていくのかということもありますので、クルーズ船の利用者数は現状から横ばいで考えていきたいと思っております。

〈貫上部会長〉

クルーズ船とイベントのトータルの利用者数での目標値については、分けたほうがわかりやすいのではないかと思いますので、ご検討をお願いします。

〈藤田委員〉

資料21ページの算出方法として、大阪市関係部局が主催・参加されているイベントということですが、基本的には管理者として大阪市が入っていると考えてよいのでしょうか。先

ほどイベントの人数が少ないのではないかとお伝えしましたが、市主催のものだけを集計しているため少ないのかと思いました。例えば、去年の冬に淀屋橋に巨大なアヒルが浮いていたイベントは含まれているのでしょうか。算出方法に記載しているイベントでどの程度が集計されているのか確認したいです。中之島だったら、四季折々に川辺で色々なイベントをして、たくさんの方が来られていると思いますが、基本的には大阪市の関係部局が主催あるいは参加しているという定義で利用者数を集計していると考えてよろしいでしょうか。

〈事務局〉

ご認識のとおり大阪市の関係部局が主催・参加しているものについて集計しております。なお、民間が実施しているイベントについては、水都大阪コンソーシアムから利用者数のデータを提供いただいておりますが、そこに報告されていないイベントについては集計に入っていない状況となっております。

〈貫上部会長〉

その他よろしいでしょうか。

〈島田委員〉

今後、市民満足度について、関係部局が関わるイベントで把握していくということですが、資料 21 ページに示されている関係部局全てがいつも共同でアンケートを実施しているわけではないと思います。このようなイベントの内、環境局が開催しているものにおいて、資料 14 ページにあるとおり今後アンケートを取っていくという理解でよかったですでしょうか。14 ページに環境局が実施、参加しているイベントとありますが、他の様々な局でもイベントをされています。今後、他の局にも依頼してアンケートを実施されるのか、それとも環境局のみで行うのか、ご検討いただきたいです。

〈事務局〉

現時点では環境局が主催するイベントについて、来場者数を増やしていこうと考えています。イベント集計については、関係各局に全て確認のうえでデータを集めたいと思っています。また、アンケート調査については、他局も異なる視点でデータ収集をされていると思いますので、我々のアンケート内容が盛り込めるか、また当局の項目数が多すぎる場合は減らすことも検討いたします。我々の部局が独自で実施するアンケートとの整合性も考慮が必要です。まずは環境局をベースとし、アンケート内容についても部会のみなさまに必要な項目数や内容をご助言いただきたいと思います。なお、他局との兼ね合いもありますので、アンケート内容も含めて慎重に検討いたします。

〈島田委員〉

承知しました。資料 28 ページに、万博に関連し、環境局が実施済みのイベントとこれから実施予定のものが示されていますが、9 月 15 日に開催された際には、来場者の感想などは聴取されたのでしょうか。もし実施されていたら、その内容も今後のアンケート設計に活用していただきたいです。

〈事務局〉

万博についてはパネル展示のみを行っており、来場者の感想については聴取しておりません。

〈島田委員〉

アンケートの設計が重要なので、「大阪ブルー・オーシャン・ビジョンを初めて聞きました」などの感想が多ければ、それも考慮してアンケートを実施したほうが良いと思います。淀川河川敷エリアでの 10 月 5 日予定の啓発は環境局主催のイベントでしょうか。

〈事務局〉

環境局と淀川区役所が連携して行うイベントのため、こちらでアンケートを取ることは可能です。

〈島田委員〉

アンケートに感想を書く欄があれば、ぜひ活用していただきたいです。来場者の感想も大事ですので、それも踏まえ、市民の認知度の把握が実状と違っていれば、今後のアンケート設計の際に考慮する必要があります。感想などの情報があれば、参考にしていただければと思います。

〈事務局〉

承知しました。当局が実施しているイベントや講座、小学校向けの水環境講座なども、アンケートは一律で実施しております。これまでのアンケート内容の結果やいただいた意見をも含めて整理し、次回の部会の際に提示させていただきます。そのうえで必要な質問項目内容についても整理させていただきます。

〈島田委員〉

お願いいたします。

〈貫上部会長〉

10 月 5 日は来週ですので、時間ありませんので、できる範囲でお願いいたします。他

はよろしいでしょうか。それでは、多くのご意見をいただきありがとうございました。事務局にいくつか宿題があったかと思しますので、よろしくお願いいたします。

それでは、本日の議事はこれで終了させていただきます。進行は事務局にお返しします。

〈事務局〉

貫上部会長、並びに委員の皆様におかれましては、長時間のご議論誠にありがとうございました。これをもちまして本日の部会を閉会とさせていただきます。ありがとうございました。